百々裏話（77）

おもて　あきら

〔明和改正謡本の周辺―その十二〕

◉明和独吟の異本をめぐって

広義の明和改正謡本の一部である明和独吟（目録とも全九冊）については、本稿の「その四」（昨年七月号）に若干論及してあったが、最近、同書の奇妙な異本に遭遇したので、それについて紹介、考察しておきたい。

観世宗家に、明和独吟の巻第二に相当する零本一冊が所蔵されている。美濃版の袋綴本で、丹表紙（中央上部に長形題簽剝落の痕跡）は水損のためか痛みがひどいが、本文料紙は損傷が少ない。本文上部の余白などに詞章の典拠となった詩歌等についての詳細な考証が書き込まれているが、それは観世大夫元章の自筆本や手沢本にしばしば見られる形であって、元章自筆の考証と認められる。片面七行で、明らかに整版で印刷された版本であるが、所々、文字や節付を胡粉で塗りつぶし、時にはその上に紙を貼り、時には直接に、墨筆で詞章を訂正している。貼紙が剝離して失われた所や、胡粉で抹消せずに筆で書き込んだ補正も、少々は存在する。

右の観世本は、明和独吟の巻第二と大部分が同版であるが、以下に述べるような重大な相違があるので、とりあえず「異本明和独吟」と仮称し、以下「異本」と略称してゆきたい。

明和独吟巻第二と比較して異本が相違している第一の点は、三部分から成る左の奥付が三頁にわたって刷られていることである。

右者依決板起猶以令
清書加奥書畢
慶長拾四年　観世左近大夫
正月吉日　身愛（花押）

不残狐疑故染毫而已
寛永拾八年　観世左近大夫
五月十六日　重成（花押）

右者代々家伝之通雖有
猶亦此度改加奥書畢
正徳六丙申歳弥生　観世織部
滋章（花押）

この奥付によれば、身愛が奥書を加えて刊行した慶長本が初版、それに重成が極めを添えた寛永本が再版、それに基づいて滋章が一部を改訂して正徳六年に刊行した第三版が異本ということになるが、とうてい信じられない。慶長の身愛の奥書の文句が元和卯月本の奥付文句（右百番之本者我等直伝石田少左衛門章句付依決板起猶以令清書加奥書畢）の焼

各流
はかま
帯・袴
もちや〈薗部〉
千葉県市川市真間2の11の17
電話〔代表〕三一―六二二・九六八

能・お茶の御写真
観世写真部
前島良彦
前島久男
港区白金台二の二の三
電話白金（441）一八四七五番
一五〇〇九番

直しであり、末の滋章の奥付が、正徳六年弥生山本長兵衛刊観世流百番謡本の初印本（京都市立高校図書館研究協議会昭和44年度研究レポート、味方健氏「続正徳弥生本考」参照）に存する滋章の奥付（右百番之本者代々家伝之通雖有之猶亦此度文句等相改加奥書畢）に若干手を加えた形で、年記・署名も同一であることからも、右の奥付がデッチアゲに過ぎないことが知られよう。元章には、権威づけのため架空の奥書の類を創作する傾向が著しく、右の奥付もその一例と言えよう。

相違の第二は、明和独吟巻第二が玉取・近江八景・和国・四季・鼓滝・香椎・一字題・真方・蛙の九曲を収めるのに対し、異本が蛙ではなくて高野物狂を収めているという最終曲の出入である。異本冒頭の目録は「高野物狂」を貼紙で「蛙」と改めているが、蛙の詞章は収めていない。この異本の所収曲が、貞享四年五月奥付（実は正徳頃の刊行らしい）の山本長兵衛刊「乱曲集」（上中下と三曲・三読物で計五冊）の上巻と、曲目・曲順ともに一致している点は注意を要しよう。

第三の相違点は、末の一曲を除く八曲の大半は同版であるのに、部分的に別版の異文があったり、異本に無い振仮名が明和独吟にあったりすることである。最も文句に相違の多い香椎に例を取ると、異本には

……日本は神国なり賢王たり、いかで宣旨を背べき、しかも竜女の身として、人皇の后に立たん事、……

とある所、明和独吟では、傍線部以外は同版なのに、「賢王」が「天孫」になり、「しかも持たるたからを、人皇の后にさゝげん事」となって、文意が変ってしまっている。こうした異同は、異本が貼紙や胡粉で塗った上の墨筆で訂正している所に主として見られ、異本の訂正の通りに明和独吟で改められている場合が多いから、明和独吟の校正刷の役割を果たしているのが異本であるかの如く見える。

大半が同版なのに細部に相違があるのは、象嵌の手法によって部分的改訂を施したためであるが、この場合、異本が原形で、明和独吟が改訂した形であることは確実視される。江戸初期から中期にかけて刊行された各種の観世流乱曲（「久世舞要集」「乱曲集」「蘭曲大成」その他）と一致する古来の形が異本に多く見られ、明和独吟の形が元章好みの新改の文句であることや、両本の異同が文字数に及んでいる所での字配りの工合や異同部分の墨次ぎの状態など、象嵌であることを示す不自然さが明和独吟に目立つことが、異本の先行を物語っていよう。

第三の相違点についての考察が、おのずと異本・明和独吟の先後を論ずることになってしまったが、奇妙な奥付を有する点と言い、蛙が無くて高野物狂がある点と言い、異本と明和独吟との距離は、校正刷と本刷の関係にしては大き過ぎるように思われる。異本の形の独吟集が何冊か先に刊行されていて、後に明和本を刊行する際に、謡本に全曲を収めた高野物狂などを除き、一部は象嵌で改訂し、また何冊かを追加して、明和独吟全九冊の形で明和本の一部にしたということも、想像できるのではなかろうか。『副言巻』をも含めた他の明和本がすべて元和卯月本の書風を模した近衛流書体で版下が書かれているのに、明和独吟は、目録と巻第六（特殊謡い物）と巻第七（祝言謡）の三冊のみが近衛流の書体で、巻第一～五、巻第八の六冊分は肥痩・濃淡の差の著しい別書体で版下が書かれている（巻第二・三・四は目録のみ近衛流）事実も、明和独吟が、明和本の一部ではあるが、少々刊行の事情が異なっていたことを想像させる。別書体で版下が書かれている六冊分、殊に従前の乱曲集に収められていた諸曲を集めている巻第二～五、八の五冊分には、明和本以前に異本と同じ形で刊行された可能性が存在するのではなかろうか。

しかし、異本所収曲が山本長兵衛本「乱曲集」上巻の曲目と一致すること、前述の奥付があること、明和独吟の咽（綴じ目）に「久世

五ノ十」などとある冊順が異本には無いことなどは、最初の一冊のみ刊行されて他は未刊に終ったことや、当初から一冊のみ単独で刊行されたことをも想像せしめる。更にはまた観世宗家蔵の一冊以外には異本の伝存が知られていない事実は、それが刊行されて市販された本ではなく、明和独吟刊行の準備段階での試作品であったことを示すようにも思われる。こうしたことから、異本の規模や明和本との関係については、明和独吟に先行する形であること以外は、現在のところ断定を避ける方が無難なようである。

それにしても、僅か一冊とは言え、元章の新改正の具体的な過程を知らせてくれるだけでも、異本の存在価値は大きい。ざっと調査した所では、明和独吟巻第二の蛙を除く八曲には、江戸中期までの観世流乱曲と比較して、文句を改めた所だけでも約三十ケ所（数え方によって若干動く）あるが、その約二割は異本の本文がすでに改訂しているもので、例えば香椎の「仲哀天皇の御戸（カラ）を、棺（ヒツギ）に納めたてまつり」（江戸中期までの旧形は「仲哀天皇の御笏を、かたじけなくも取出し」）などがそうである。また約五割は、異本が旧形のままの本文を貼紙や胡粉の上の墨筆で訂正した文句を、明和独吟が象嵌によって継承したものである。異本が旧形のままなのを明和独吟が新たに改訂した所は五例で、二割弱に過ぎない。残りは異本の訂正を明和独吟が別の形に再改訂しているもので一字題の冒頭、旧形と異本の本文は「抑定家（サヴイエ）の」、異本訂正は「柳五十首の」、明和独吟は「抑四季の歌の」など）、改訂が複雑な過程を経ていることを示している。これらの改訂文句に、異本に元章が書き込んだ考証に基づくものが少なくないことも興味深い。捏造に相違ない異本の奥付にしても、それが明和独吟では除かれている事実と合わせ考えるとき、元章の性癖や考証態度の揺れ動きや限界が察知されて、これまた有益な資料と言えよう。

× × × ×

明和改正謡本について、新たに言及したいことや前説を補正したい点が数々あるが、いささか長期にわたり過ぎたようである。最近に明らかにし得た明和本廃止の事情などは、紙数の関係からも別の場で論ずることにし、次回からは、明和本を離れた別の問題を採り上げることにしたい。

（45・12・2）

明年の例会の会場は**水道橋能楽堂**です。**1月例会**（15日）は**1時30分開演**です。**2月以後は**いずれも**第2金旺日**午後**6時開演**です。全部指定席となります。

再放送

■十二月三十一日（木）午前八時よりNHK教育テレビで、万国博覧会鉄鋼パビリオンにおいて上演した「善知鳥」を再放送いたします

新年の放送

■一月二日（土）午前七時から八時および午後七時から八時の間にNHK第二放送において、一謡「胡蝶」（鍈之丞　太鼓　柿本豊次）を放送。

■一月十日（日）午前八時よりNHK第二放送において「鉢木」（シテ鍈之丞　ワキ　森茂好　アイ山本則寿　地謡寿夫　静夫　宏充）を放送。

× × × ×

初会「翁」の舞台をみないと新年のすがすがしい気分になれない……、と毎年の初会の翁には多くの期待が寄せられております。明年は、古稀を過ぎた**鍈之丞**の「**翁**」で初会を開きます。そして、還暦過ぎの老人か十五才までの少年のみが舞うとされている「**鷺**」を、十四才の少年**観世暁夫**（静夫の長男）が披きます。白一色の鷺の舞、清らかさをたたえて少年の花を期待するにふさわしい作品。狂言は**野村万之丞**の「**文蔵**」そして留めは京都で活躍の**片山慶次郎**の「**熊野**（読次之伝）」で親しみ深い作品。

■本年もご後援ありがとうございました。悪くご越年くださいまして、明年もどうぞよろしくお願い申上げます。